

# 高梁の 近代化遺産 10

## 旧手荘町役場 (現川上地域局)

位置 大字地頭一八一九ノ一番地  
敷地面積 一九五一平方メートル  
建築面積 七五四・三平方メートル  
床面積 一一四五・九八平方メートル

昭和二十九年四月一日、手荘町・大賀村・高山村の三か町村合併により川上町が誕生。庁舎として使用されたのは旧手荘町役場でした。旧手荘町役場は昭和四年五月十日に落成した木造瓦葺二階建て。建坪は、本館が五十坪で書庫六坪。『川上町史』地誌編(川上郡



ファサードの切妻屋根から1階と2階の間のドイツ壁部分の仕上がり美しく、ハーフトインパーとした破風がアクセントになっています。ただ、1階右側の玄関ポーチの不協和音が気になります。

ではないでしょうか。正面の切妻屋根は少し急な勾配を描いています。破風はドイツ壁に木の骨組みを見せたハーフトインパー。その中央に町(村)のマークを添えています。アルミサッシュに変更されてはいますが、一階と二階の窓の間にも六角形の飾りを持たせたドイツ壁を置き、建物の高さを強調しています。ファサードの左右は洋風建築技法の代表である下見板張

川上町、平成三年)は、「和洋折衷県下稀に見る庁舎」と記しています。町史が伝えるところによれば、大正三年の赤松佳衛村長時代から庁舎新築準備として毎年五百円を積み立て、加藤郡平村長時代の昭和三年六月に工事契約を結び、六千円が投じられました。ファサード(建物の正面)の切妻屋根を中心にほぼ左右対称とした建物は、落ち着いた佇まいを見せる地頭の町を象徴する建造物だと思えます。左右を対称とする建築様式は明治以降の特徴。行政、教育、医療機関や工場などに広く採用されました。明治三十七年に完成した旧高梁尋常高等小学校本館(現在の高梁市郷土資料館)も、玄関ポーチを中心にほぼ左右対称とした好例です。近代の青春と呼ばれる大正期を過ぎた昭和初期。重厚な擬洋風建築から発展し、西洋風の中に日本独自のロマンティズムを併せ持つようになった建築物。それが旧手荘町役場・旧川上町役場

り。全体に縦と横のラインをバランスよく組み合わせた仕上がりとしています。町史が称えるように、竣工当時、ハイカラな役場はさぞ目を引いたことでしょう。ただ、一階の右側入口には少々無骨な切妻屋根を配し、左右対称の均衡を破ったアクセントとしています。昭和三年頃の川上町は、煙草や蒟蒻などの農業生産や鉱物資源の採掘が過渡期を迎えた頃です。六月には張作霖爆殺事件が起こり、わが国は戦時色を濃くしてゆきます。手荘町役場として生まれた建物は、川上町の昭和を見つめ、二回の市町村合併の歴史を伝えながら八十一歳の歳月を刻んできた近代化遺産です。



2階の左右は下見板張り仕上げ。全体に直線を貴重とした素材構成で、巧みに組み合わされた縦と横のラインが役場建築に風格と気品を持たせています。

編集と発行(毎月15日発行)高梁市総務部企画課

〒716-8501 岡山県高梁市松原通2043 電話0866(21)0210 ホームページアドレス <http://www.city.takahashi.okayama.jp/>



環境にやさしい大豆油インキを使用しています。

本紙は環境保全のため再生紙を使用しています。